

第7回京都大学医療技術短期大学部 健康科学集談会抄録

日時：平成8年12月25日（水）

13：00～16：40

場所：京都大学医療技術短期大学部 第2大講議室

1. 後期高齢者に対する体力測定と運動訓練

浅川 康吉・池添 冬芽・羽崎 完
黒木 裕士・森永 敏博・濱 弘道
(理学療法学科)

養護老人ホームに入居する後期高齢女性を対象に体力測定を実施し日常生活活動(Activities of Daily Living, ADL)との関連を検討した。また、その結果を踏まえて運動訓練を実施した。これらの取り組みから得られた知見より、(1)起居・移動動作能力と関連の深い体力測定項目(2)運動訓練の実施効果(3)地域在住後期高齢者との体力の差、に関する検討結果を報告する。

起居・移動動作能力は Barthel index の一部である Mobility index により評価し、体力測定は握力、脚力、筋持久力、バランス、柔軟性、敏捷性の各項目について行った。運動訓練は簡単な体操を1回15分、1日1回、週5日の頻度で18ヶ月間実施した。対象群は検討項目に応じて構成し、多群間の比較には Kruskal-Wallis 検定を、2群間の比較には Wilcoxon 検定を用いた。

(1) 日常生活活動能力と関連深い体力測定項目について

各体力測定項目について要介助群3名、要監視群4名、自立群14名(計21名、85.7±5.3歳)を比較した結果、脚力($p < 0.05$)と筋持久力($p < 0.01$)に群間の差を認めた。

(2) 運動訓練の実施効果の検討

運動訓練参加率が80%以上の参加群7名(86.3±5.1歳)と10%未満の不参加群4名(86.8±3.9歳)を比較した結果、不参加群では脚力や筋持久力で低下($p < 0.05$)が認められた。

(3) 入所者と地域在住後期高齢者の体力比較
入所者9名(81.7±3.1歳)と地域在住者9名(79.4±2.7歳)を比較した結果、握力を除く前項目で入所者が低かった($p < 0.05$)。

以上の結果より、脚力および筋持久力は起居・移動動作能力と関連深いこと、ならびに、これらは運動訓練により維持できることが示唆された。起居・移動動作の自立を保つには日々の簡単な運動訓練が有用と考えられる。また、養護老人ホームの入居者は地域在住者より体力水準が低いことから運動訓練の必要性はより高いと思われた。

2. 「刺入による感染」

岸下 雅通
(衛生技術学科)

針刺し(誤刺)という語は医療従事者を想定している。医療の現場で感染症患者の血液などで汚染した注射針を間違えて手指などに刺すことを意味しているが、しかし、何も感染症患者のそれだけでなく、そもそも血液、体液、組織などは感染性医療廃棄物であり、等しく扱うべきである。また、注射を介した感染が患者にも発生することは、4年前の東京での激症B型